

研究をささえる情報基盤

SciFinder Scholar が研究活動にもたらす恩恵

大学院自然科学研究科 生命科学専攻 精密分子構築学研究室
博士後期課程 3年 小阪 孝史

私が専門としている有機化学は積み重ねの学問である。既知の実験事実や理論を土台として、その上に最先端の研究が築かれ、それがまた新たな土台となっていく。しかし有史以来、人類が積み重ねてきた研究成果は膨大な量となっており、欲しい情報を多数の科学雑誌の中から手作業で探し出すのは、ほぼ不可能である。そこで文献検索の手段として長い間利用されていたのが、American Chemical Society が提供している Chemical Abstracts (以下 CA) である。CA は、有機化学や無機化学、生化学、高分子化学などの多分野における世界中の科学雑誌の妙録誌であり、化学物質や合成法、特許などの情報が収録されている。しかし、年々増えていく CA は膨大な量となり、手作業での情報検索に多大なる手間と時間が要求される為、やがて速やかに情報検索が行える SciFinder Scholar が検索ツールの主流となった。SciFinder Scholar はオンライン検索法であり、1900年以降に発行された9,500誌以上の科学雑誌に収録されている論文や特許情報など、科学全般に渡る情報が電子データとして蓄積されている。操作が簡単な上、検索時間が極めて短く、また検索条件も細かく設定出来るなど利点が多い為、世界中の研究機関や科学系企業が先を争って導入した。金沢大学でも2年前に SciFinder Scholar を導入したが、その導入時期は世界的に見ると研究機関としては極めて遅いと

言える。3年前、就職活動中の修士課程の学生が、企業の面接官に『検索はCAを使っています』と述べたところ、大変驚かれたそうである。今や、SciFinder Scholar なしでは世界中の研究機関とは全く太刀打ちできないほど、SciFinder Scholar が研究に与える恩恵は大きい。例えば、有機化学分野の研究における SciFinder Scholar の最大の利点は、化合物の構造を描いて検索できる点である。即ち、描いた化合物が既知化合物であれば、その合成法を即座に知ることができる。またそれが新規化合物であっても近似化合物が既知であれば、参考とすべき合成法や反応条件を知ることができる為、実現性の高い短期的・長期的な研究計画の立案が容易になり、研究の効率が飛躍的に改善された。他にも SciFinder Scholar を用いれば、研究テーマの背景や新規性の検索や特定の研究者や反応の文献調査、購入可能な試薬の検索などを行うことができる。以上の様に、SciFinder Scholar は検索条件の細かな設定が可能なので、我々は知りたい情報を容易に検索できる様になり、研究の質を更に高めることができた。研究活動は如何に他研究グループに先んずるかという競争である。効率的な情報検索を行うことができる SciFinder Scholar は、今後「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を目指している金沢大学に大きく貢献し続けるであろう。

SciFinder Scholar は同時アクセス数1の契約となっています。
効率的な運用のため、図書館 HP から予約のうえご利用ください。